

夏の終焉を告げるツクツクボウシの声も細まり、高くなった空が渡り鳥に先を急いでいるかのようです。市井では、コロナの自粛が解けて、文化芸術やスポーツ等、多くのイベントが三年ぶりに開催され、学校では、学習や行事の最も充実する2学期がスタートし、子どもたちの元気な声が響いていると思います。子どもたちの心身の健康や安全に、今まで以上に心を砕いて、学校運営に当たるようお願いいたします。

本日は一点のみ、家庭教育の推進についてです。昨今、地域格差や経済格差、教育格差が、負のスパイラルとなっていると言われます。現実に愛知県内でも地元で通える進学校がないため、高校進学段階で親元を離れて下宿を余儀なくされている中学生もいます。また、一般的に、学歴と所得に相関関係があることは否めませんし、子どもたち6人に1人が貧困家庭とも言われ、塾に通えない子どもは、一流大学進学は難しいという巷説（これは個人的には首肯できませんが）さえあります。

このような格差が浸潤する世の中ではありますが、小中学校は最大限、全ての子どもたちに教育の公平性を担保するように尽力しています。しかしながら、小中学校は働き方改革の進行により、従来から担ってきた学校の役割や、教師の情熱によって捧げられてきた教育活動を、やむを得ず縮減せざるを得ない状況にあります。そうすると、頼りにしたいのは、家庭教育や地域の教育力です。とりわけ、家庭教育が要となっていきますが、残念ながらこの危機感はなかなか理解されていないように感じます。例えば、本市においても、二年前から中学校の朝部活がなくなり、その分生徒が家庭で過ごす時間が増えたのですが、スマホの時間になってしまったのではという心配の声も聞いています。

また、話題のチャットGPTについても、家庭教育における正しい理解が不可欠になってきました。チャットGPTは、教育活動の目標に照らし合わせて使っていく、あるいは制限していくべきと考えます。学校でもチャットGPTは扱えるように、いずれ適切なタイミングで教えるべきでしょう。しかし、本来、感想文や作文を書かせるのは、子どもが、自分の感じたことや考えたことを文章化させるプロセスで、子どもの思考力や自己分析力を高めること、そして子どもに内的な自己変革をもたらすことがねらいです。そこをAIにやらせてしまえば、子どもの力はついていきません。足にバネをつけて高飛びをさせるようなものです。この教育活動のメカニズムが、家庭はもちろんのこと、社会全体に広く共通理解される必要を感じています。

部活動の地域移行や10月から始まるラーケーションにも似た側面がありますが、これからは、社会全体が子育てや家庭教育にも関心を寄せて取り組んでいかないと、子どもたち全てを健全育成することは叶いません。子育てや塾からゲームやスマホの扱いまで、家庭教育の在り方を皆で共通理解し、保護者としての営みを支え合っていく必要があります。教育委員会としては、校長会をはじめ、関係課や市P連等とも連携しながら、親学の推奨に取り組んでいきたいと考えています。